

# やまざくら

水色じゃない海が  
あっても楽しいよね!



夏休みの一日、色がついたベビーオイルと水を使って不思議な世界を作り出しました。どんな世界ができるのかな!親子でわくわくしながら取り組みました。



自分だけの  
**瓶**の中に  
**海**を作るぞ!



夏休み親子ふれあい手作り教室  
オーシャンボトル作成  
7月30日(日) 領家公民館にて



どんな海ができるのかな?

皆さんこんにちは、木崎地区会会長の金子でございます。



青少年育成木崎地区会  
会長 金子康

子どもたちが楽しめる活動を

私には子供が三人おりまして、皆木崎小から木崎中へと進む中で、地域の皆様に大変お世話になりましたので、少しでもそのご恩返しをしたいと昨年五月に会長を引き受けました。

私たちの活動の中心となる木崎小ですが、今年創立百五十周年の大きな節目を迎えます。開校した明治七年頃を史実から思い描きますと、この年に新橋〜京橋間に鉄道が開通したとのこと、まだ電車すらなかった頃ですね。時の政府が明治五年に学制を敷き、その二年後に木崎小学校がお隣の長覚院に開校しました。この時の児童数は、四十八人だったとのこと。征韓論(明治四年)から西南戦争(明治十年)を経て、文明開化の世に福沢諭吉の「学問のすすめ」が出版され、大久保利通や伊藤博文らによる国家建設が急ピッチで進められた頃でした。

時を経て現在木崎小は、児童九百七十四人を擁するマンモス校となり、「未来の笑顔のために」と、教職員三十人が日々奮闘されています。そんな木崎小を、私たちは地域の方で支えようと考えています。

その内容の一端をご紹介しますと、十五年続いているチャレンジ教室を始め、今年の五月には「親子ふれあいたこ作り」、七月は「親子ふれあい手作り教室」。昨年は水の中でキラキラ光るオーシャンボトルを作りました。九月には「親子ふれあい歩こう会」を予定するなど、親子とのふれあいを前提にして、子どもたちが楽しいこと、ためになること、元気になること、そんな活動を工夫してまいりますと考えています。今後とも、青少年育成木崎地区会に、ご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。



# チャレンジスクールでの活動



学校地域連携

コーディネーター

岡 義行

本年度より木崎小学校にお世話になっております。よろしくお願ひいたします。

木崎小学校のチャレンジスクールは青少年育成木崎地区会の皆様の全面的なご支援の下、木曜日の放課後と土曜日の午前に活動しています。両方の活動を合わせると年間二十回ほどになり、百四十名を超える児童が参加しています。

児童は教室での自主学習や英語学習、図書の読み聞かせなどに取り組み、体育館では運動遊びを楽しんでいます。こうして多くの子どもたちが楽しく仲よく活動することができるようにも皆様が献身的に応援してくださるお陰です。とてもありがたいことだと感謝しています。

また、地域の皆様が生き生きと活動されている姿は、子どもたちにとって、よいお手本になっています。このようにチャレンジスクールは子どもたちの居場所づくりとして、豊かな心を育てる力になっていきます。

これからも皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

学校地域連携「コーディネーター」は、全ての市立小・中・特別支援学校に、一名ずつ配置されている学校職員で、学校と地域の皆様をつなぎ、地域ぐるみで子どもを育てるために、日々活動しています。



## チャレンジスクール



「さいたまチャレンジスクール」は、希望する児童の自主的な学習をサポートし、学ぶ楽しさを教え基礎学力の向上や学習習慣の定着を図ることを目的としています。さらに、勉強だけでなく、ゲーム、そして、読み聞かせ、工作、英語活動等、いろんな内容を低・中・高学年に分かれそれぞれ活動しています。

### あなたの経験やスキルで子どもたちを育てよう！

私たちと一緒にチャレンジスクールスタッフとして参加してみませんか。児童を対象に、学習や体験活動等のサポートをします。子どもが大好きな方、大歓迎です！

#### 活動時間

木曜日：午後 3 時～4 時 30 分

土曜日：午前 9 時半～11 時 30 分

#### 内容

体育館で、体を動かしての遊び、教室での学習の補習や工作 等

#### 問い合わせ先 小学校、青少年育成木崎地区会迄



ボランティアのメンバー

### 良い子の本紹介

#### 『いのちの食べかた』



森 達也  
(角川文庫 2014年刊)

十年前に文庫化された本ですが、ロングセラーの名作です。著者はドキュメンタリーの映像、活字双方で活躍されています。

第一章、二章では、牛や豚のお肉がどのようにして食卓までやってくるのかを丁寧にドキュメントしています。私たちが日々「いただきます」というその言葉の意味が、実感として理解できます。そして第三章では、食肉に関する職業の話から、この国の歴史と差別の問題、戦争とメディアの問題へと深まります。内容は難しく感じますが、著者は中学生くらいを想定して、問ひかけるように綴って行きます。多くの漢字にルビがつけられていることにもその意図が表れています。

読み終えると「知る」ということの本質に気づかされます。情報社会の近年、私たちの「知る」は一瞬の幻のようです。本当に「知る」ことができれば、そこから思考が生まれ、真理が見え、人間らしい大切なことを思い出させてくれます。

(文責 岩崎剛久)